

農村における伝統産業を活用した地域ブランディングの実現に向けた課題 — 京都府亀岡市保津町における京藍栽培を事例として —

Challenges for realizing regional branding with traditional industry in rural areas
— Case study of Kyoai cultivation in Hozu town, Kameoka City, Kyoto Prefecture —

○吉田幸布*・鬼塚健一郎**・豊嶋尚子*・星野 敏**

○YOSHIDA Yukiho*, ONITSUKA Kenichiro**, TOYOSHIMA Naoko*, HOSHINO Satoshi**

1. 背景

日本の伝統工芸産業は衰退傾向にあり、伝統的工芸品の利用機会の減少や後継者不足とともに、原材料の確保が難しい状況にある。他方、日本各地で「働く場所」の不足による農村部から都市部への人口流出が深刻であり、こうした地域への定住促進のためには地域産業の振興が重要であると考えられる。このような状況において、近年、中山間地域における地域ブランディングや特産品開発による活性化に注目が集まっており、こうした活性化の取り組みによって地域にもたらされる影響として経済効果や遊休農地解消といった効果があるとされている¹⁾。

以上より、伝統工芸品を活用した地域ブランドの創出や特産品開発、およびそのための原材料の現地生産を促進することにより、伝統工芸産業の原材料の供給に資するだけでなく、地域産業の振興や遊休農地の解消といった効果が期待できると考える。

2. 目的

本研究では、農村地域における伝統産業を活用した地域ブランディングの例として、藍栽培に着目する。国内生産量が減少している藍の栽培を拡大するためにはより多くの農家の協力を得ることが重要であると考えられるが、地域に新たに導入することになる藍栽培に対して農家の関心や意欲は高くないことが推察される。その背景には藍栽培における課題があると考えられ、それらの課題が改善されれば農家が藍へ転作する可能性もあると考えられる。本研究では、京都府亀岡市保津町の京藍栽培を事例として、作物の栽培条件と農家の意識の面から、京藍栽培を活用した地域ブランディングの実現に向けた課題を明らかにすることを目的とする。そのために、「京藍と保津町で作付けされている他の作物の収益性、機械利用状況、土地条件を比較することにより転作作物としての京藍の課題を明らかにすること」、「農家の京藍栽培意欲に影響を与える要因を解明し、京藍栽培普及上の課題を明らかにすること」という2つの課題に取り組んだ。

3. 研究方法

収益性、機械利用状況や土地条件の面からの京藍栽培の課題を明らかにするために、文献調査および農家を対象としたヒアリング調査を行い、京藍および水稻、大豆、小豆の栽培条件について分析を行った。また、農家の京藍栽培意欲に影響を与える要因を明らかにするために、保津町内の全農業従事者を対象とした質問票調査を実施し、その結果から農家の京藍栽培意欲に影響を与える要因について分析した。

所属：*京都大学大学院農学研究科 (Graduate School of Agriculture, Kyoto University), **京都大学大学院地球環境学
堂(Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University)

キーワード：農村振興、京藍、地域ブランディング、行動意図、パス解析

4. 収益性，機械利用，土地条件からみた京藍栽培の課題

収益性の面では，水稲が 10a あたり約 10 万円，水稲からの転作が進んでいる黒大豆と小豆が同面積あたり約 11 万円の生産額である²⁾のに対し，京藍は同面積あたり約 17 万円であった。他方，水稲は機械を利用した作業体系が確立されており，大豆や小豆の栽培においても機械利用が広がっているが，京藍栽培ではほとんどの工程が手作業で行われていた。土地条件については，上流から肥沃な土砂が運ばれ桂川左岸は稲作の最適地となっている³⁾ことから，保津町では水田だった土地がほとんどで作土が浅い。また，土壌は粘土質で，水はけはあまり良くない。一方で，大豆や小豆，京藍の栽培には排水性と保水性の良い土壌が適している⁴⁾。

5. 農家の京藍栽培意欲に影響を与える要因

広瀬(1994)⁵⁾ および村上(2008)⁶⁾ のモデルを参考に仮説モデルを設定し，Amos を用いてパス解析を行った(図 1)。その結果，「身近に藍に関わる人がいるか」から「藍への興味」へのパスと「藍栽培の課題認識」から「藍栽培への取り組み意欲」へのパスを除いて 1%あるいは 5%水準で有意となり，特に藍への興味から藍栽培への取り組み意欲へのパス係数が 0.703，藍への期待から藍への興味へのパス係数が 0.495 と高い値となった。

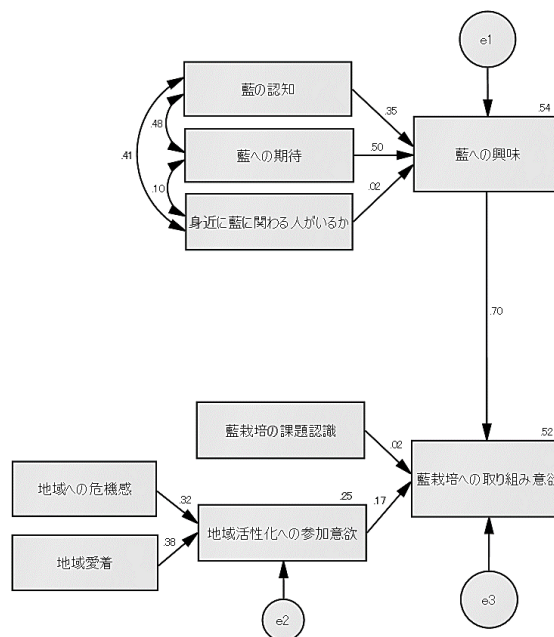


図 1 パス解析の結果
Figure1 Analysis result

6. 考察

京藍の 10a あたり生産額は水稲のそれよりも大きいですが，機械化されていない京藍栽培にはより多くの収益性が求められている。また，水田の多い保津町で十分な収量をあげられるような京藍の栽培方法は確立されておらず，農家が取り組みにくい要因の一つになっていると思われる。

農家の京藍栽培意欲に関わる要因については，藍への期待が藍への興味に，さらに藍への興味が藍栽培への取り組み意欲に強く影響すると考えられることから，藍染めや藍栽培などの取り組みが地域活性化に役立つだろうとの期待を持ってもらうために，京藍を利用した地域ブランディング活動に取り組み，それを地域の人々に向けて発信することが重要であると考えます。

引用文献

- 1) 宮地忠幸(2011)：中山間地域における特産品開発の地域的意義に関する一考察—阿武隈高地における桑の特産品開発を事例として—，国士舘大学地理学報告，19，p. 1-14
- 2) 近畿農政局：国営農地再編整備事業「亀岡地区」の事後評価結果，p. 4
- 3) 近畿農政局ホームページ
<https://www.maff.go.jp/kinki/seibi/sekei/kokuei/kameoka/kameoka001.html> (2020年1月22日閲覧)
- 4) 日本作物学会 編 (2002)：作物学事典，朝倉書店
- 5) 広瀬幸雄(1994)：環境配慮的行動の規定因について，社会心理学研究，10(1)，p. 44-55
- 6) 村上一真(2008)：環境配慮行動の規定要因に関する構造分析，環境情報科学論文集，22(第22回環境情報科学学術研究論文発表会)，p. 339-344